

3-2 未熟児外科の問題点

長屋昌宏*

〔はじめに〕

私共に新生児センター（愛知県コロニー中央病院新生児センター）が発足したのは1970年であるが、それ以来、1984年12月までの15年間に経験した新生児外科症例は741例であった。そのうち成熟児例は575例、未熟児例は166例（22.4%）であり、死亡率では、前者が11.6%であったのに対し、後者は30.1%（全体で15.8%）であった。これを5年毎で分析し比較してみた（表1）。

初めの5年間（1970～1974年）では、総数205例のうち未熟児例が占めた割合は30例、14.6%と少なかった。そして、死亡率では、成熟児例が21.7%であったのに対し、未熟児例は36.7%（全体で23.9%）と高かった。

次の5年間（1975～1979年）では、総数270例のうち未熟児例は57例（21.1%）と若干増加した。死亡率では成熟児例が8.0%、未熟児例が31.6%（全体では13.0%）であった。

そして、最近の5年間（1980～1984年）では、総数266例のうち未熟児例は79例、29.7%と増加した。死亡率は成熟児例が6.4%、未熟児例が26.6%（全体では12.4%）と若干の改善を見た。

以上の分析から言えることは、新生児外科症例のうち未熟児例が占める割合は年々増加の傾向を示し、最近では全体の30%前後に及ぶこと、未熟児例の死亡率は低下してきているものの、依然として25%を下まわらないこと、全体の死亡率も低下しているが、それは成熟児例での著しい低下（現時点では5%前後）によってもたらされた要素が大きかったことであろう。

以下、未熟児例が占める頻度の高い代表的な新生児外科疾患を抽出して述べる。

1. 食道閉鎖症

食道閉鎖症に未熟児例が多く見られることはよく知られている。私共においても同様で、総数62例のうち20例、32.2%が未熟児例であった。そして、死亡率では、成熟児例が19.0%（42例中8例）であったのに対し、未熟児例では40.0%（20例中8例）の高率であった。未熟児例での平均体重は1968gであり、極小未熟児は1例のみであった。

2. 十二指腸閉塞症

内因性と外因性を含め、かつ、腸回転異常症を除いた十二指腸閉塞症を34例経験している。そのうち、未熟児例は13例（38.2%）と多かった。死亡例は3例（8.8%）で、うち2例が未熟児例であった。未熟児例の平均体重は1955gであり、現時点では、それが治療上に大きく影響することはない。

3. 腸閉鎖症

腸閉鎖症は51例経験しているが、そのうち未熟児例は21例（41.2%）と多かった。未熟児例の平均体重は2120gであり、最小体重児は1500gであった。未熟児例の大多数は、small for datesであり、そのため成熟児と比べて、未熟児であるがために治療に難渋することはなかった。成熟児の死亡例が5例（17%）、未熟児のそれが3例（14.3%）と差がなかったことからも裏づけされる。

4. 鎮肛

新生児期に来院した鎮肛症例は124例であったが、そのうち未熟児例は23例（18.5%）であり、平均的な発生率であった。死亡例は成熟児が6例（6%）、未熟児が4例（17%）であった。

* 愛知県心身障害者コロニー小児外科

表1. 新生児外科症例の推移

年 次	総数	例数 (%)	死亡例 (%)
1970-1974	205	成熟児 175例 (85.4) 未熟児 30例 (14.6)	38例 (21.7) 49 (23.9) 11例 (36.7)
1975-1980	270	成熟児 213例 (78.9) 未熟児 57例 (21.1)	17例 (8.0) 35 (13.0) 18例 (31.6)
1981-1985	266	成熟児 187例 (70.3) 未熟児 79例 (29.7)	12例 (6.4) 33 (12.4) 21例 (26.6)
合 計	741	成熟児 575例 (77.6) 未熟児 166例 (22.4)	67例 (11.6) 117 (15.8) 50例 (30.1)

5. 腹膜炎

新生児腹膜炎は現在もなお治療の困難な疾患として知られるが、私共は57例経験している。未熟児例は20例 (35%) であった。死亡例は、成熟児が16例 (43%)、未熟児が9例 (45%) と多く、両者に差はなかった。腹膜炎をもたらした原疾患によって、内容が異なるので、3つに別けて述べる。

1) 胃破裂

胃破裂は22例経験したが、全体の死亡率は64% (14例) と高かった。特に、未熟児例では、5例 (22.7%) 中4例 (80%) の死亡をみており、治療が極めて困難であった。未熟児例での平均体重は2203 gであり、極小未熟児例はなかった。

2) 壊死性腸炎

壊死性腸炎は20例経験したが、そのうち、未熟児例が11例 (55.5%) と半数以上であった。成熟児にみられたものはbaseに感染を伴っていることが多かった。9例中5例 (55%) の死亡をみており。一方、未熟児にみられたものは、病変部が限局していることが多く、回腸末端部にpunched outされた穿孔を認めるもの多かった。未熟児例の5例は極小未熟児であり、うち4例は1000g以下の超未熟児であった。

3) その他の腹膜炎

その他の腹膜炎は15例であったが、原疾患は、

ヒルシュスブルング病が5例、小腸閉鎖症が5例、その他が5例であった。成熟児が10例、未熟児が5例であったが、死亡例は未熟児の volvulus による1例のみであった。

6. 脘帯ヘルニア

44例の臍帯ヘルニアを経験しているが、未熟児例は15例 (34.1%) であった。死亡例は成熟児が6例 (20.1%)、未熟児例が9例 (60%)、全体では34.1%であった。

7. 先天性腹壁破裂 (Gastroschisis)

先天性腹壁破裂は28例経験したが、うち未熟児例は21例 (75%) の高率であり、今回の分析では最も高い頻度であった。死亡率で検討してみると、成熟児例が28.6% (7例中2例)、未熟児例が38.1% (21例中8例)、全体で35.7%であった。

8. その他の疾患

その他の代表的な新生児外科疾患としては、横隔膜ヘルニア、肥厚性幽門狭窄症、腸回転異常症、ヒルシュスブルング病などがあるが、それらが未熟児に発生することは極めて稀であった。

〔おわりに〕

私共が経験した新生児外科症例を成熟児と未熟

児に分けて検討してみた。

その結果、未熟児症例の頻度は年々増加の傾向が見られることと、各疾患によってその頻度は大きく異なることが明らかになった。そして、未熟児症例の成績は少しづつ進歩はしているものの、依然として25%を下まわっていないことも明らかになった。即ち、先天性腹壁破裂、臍帯ヘルニア、

壊死性腸炎、十二指腸閉鎖症、腸閉鎖症、食道閉鎖症などには未熟児例が多くみられ、詳しくは触れなかつたが、幽門狭窄症、横隔膜ヘルニア、腸回転異常症、ヒルシュスブルング病では極めて少なかつた。

今後、死因に関して更に検討し、各疾患での未熟児例の問題点を明らかにして行きたい。

↓ 検索用テキスト OCR(光学的文字符号認識)ソフト使用 ↓

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

〔おわりに〕

私共が経験した新生児外科症例を成熟児と未熟児に分けて検討してみた。

その結果、未熟児症例の頻度は年々増加の傾向が見られることと、各疾患によってその頻度は大きく異なることが明らかになった。そして、未熟児症例の成績は少しづつ進歩はしているものの、依然として25%を下まわっていないことも明らかになった。即ち、先天性腹壁破裂、臍帯ヘルニア、壞死性腸炎、十二指腸閉鎖症、腸閉鎖症、食道閉鎖症などには未熟児例が多くみられ、詳しくは触れなかったが、幽門狭窄症、横隔膜ヘルニア、腸回転異常症、ヒルシユスブルング病では極めて少なかった。

今後、死因に関して更に検討し、各疾患での未熟児例の問題点を明らかにして行きたい。